



TITLE:

京大広報 No. 529

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 529. 京大広報 1998, 529: 586-595

ISSUE DATE:

1998-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209186>

RIGHT:

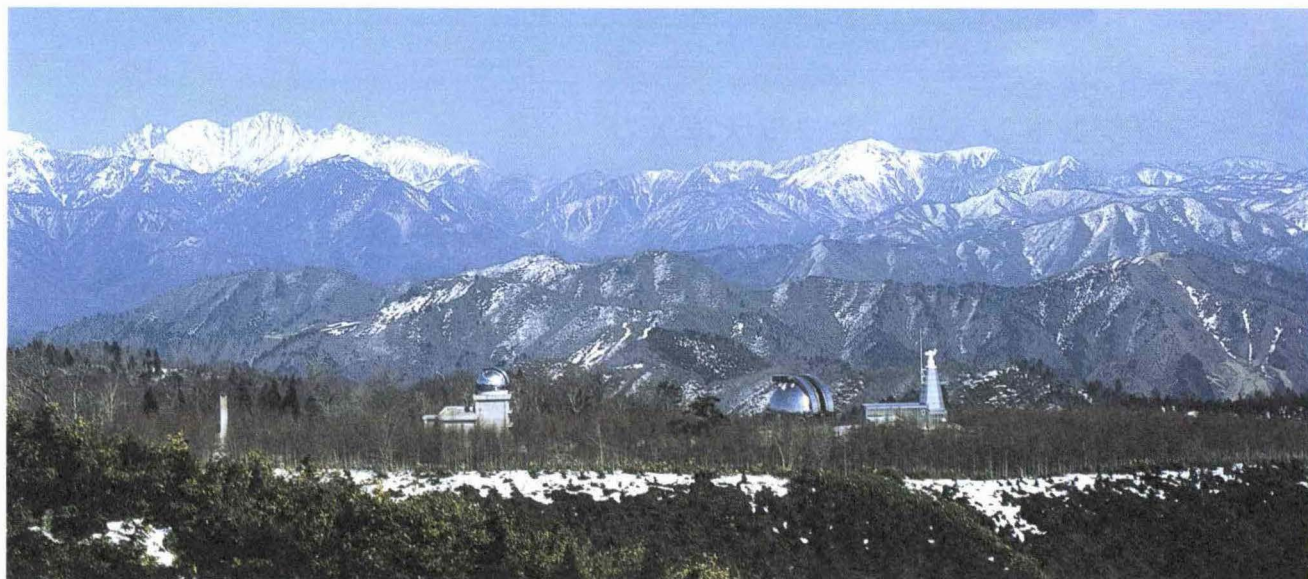
ファイル中には未許諾による非表示部あり.



京大広報

No. 529

1998. 11



大学院理学研究科附属天文台飛騨天文台一関連記事本文588ページ

目次

〈大学の動き〉

- 博士学位授与式587
ジョージワシントン大学、タフツ大学及び
ニューサウスウェールズ大学との学術交流587
平成10年度日本語・日本文化研修留学生の
受入れ587

〈部局の動き〉

- 大学院理学研究科附属天文台
飛騨天文台創立30周年記念式典・祝賀会588
寄附講座「国際予防栄養医学講座」の更新589

〈日誌〉589

〈計報〉590

〈洛書〉

- なぞなぞ語りの歌 土方弘明590

〈資料〉

- 人事院勧告の取り扱いに関する国立大学協会
の要望書591

〈公開講座〉

- ー終了報告ー
総合人間学部、大学院人間・環境学研究科
公開講座「生きる・知る・創る
ー生命活動の諸様相ー」592

〈話題〉

- クラブ紹介 ーボート部ー593

〈お知らせ〉

- 総合博物館建設に伴う通路変更について594
能楽鑑賞会595

大学の動き

博士学位授与式

9月29日（火）午前10時30分から、京大会館において、総長、副学長をはじめ、各研究科長、事務局長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記（平成10年7月23日付、及び9月24日付）が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時25分終了した。

今回の学位授与者数は、7月23日付課程博士27名、論文博士36名の計63名、9月24日付課程博士28名、論文博士26名の計54名であった。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研 究 科	平成10年 7 月			平成10年 9 月		
	課程 博士	論文 博士	計	課程 博士	論文 博士	計
	名	名	名	名	名	名
文学研究科	—	2	2	1	2	3
教育学研究科	—	1	1	—	—	—
法学研究科	—	1	1	—	—	—
経済学研究科	—	3	3	2	2	4
理学研究科	6	2	8	7	2	9
医学研究科	9	6	15	4	4	8
薬学研究科	2	5	7	—	—	—
工学研究科	4	10	14	7	12	19
農学研究科	5	6	11	5	2	7
人間・環境学研究科	1	—	1	2	1	3
エネルギー科学研究科	—	—	—	—	1	1

ジョージワシントン大学、タフツ大学及び ニューサウスウェールズ大学との学術交流

この度「学術交流に関する一般的覚書」を、アメリカ合衆国のジョージワシントン大学、タフツ大学及びオーストラリアのニューサウスウェールズ大学と交換した。三大学とも、授業料等不徴収による大学間短期学生交流を行う候補校として国際教育プログラム準備委員会（現国際教育プログラム委員会）から推薦された大学であり、「学術交流に関する一般的覚書」を交換するとともに、「授業料等を不徴収とする大学間交流協定」を締結するに至った。いずれも、人文・社会科学及び医学・自然科学の分野

を持つ総合大学である。

ジョージワシントン大学は1821年創立の私立大学で、教員数は約2,800人、学生数は約20,000人、タフツ大学は1852年に創立された、教員数は約1,000人、学生数は約9,000人の私立大学である。ニューサウスウェールズ大学は1949年創立の国立大学で、教員数は約1,600人、学生数は約31,000人である。

本学の「覚書」交換校は、上記3校を含めて現在19カ国41大学2大学群となっている。

平成10年度日本語・日本文化研修留学生の受入れ

昭和57年度から、本学では「日本語・日本文化研修留学生制度」（『京大広報』No. 240 1982. 10参照）による留学生を受入れているが、平成10年度は12カ国から15名を受入れることになり、10月14日（水）留学生センターにおいて三好郁朗副学長はじめ関係教職員の出席のもとに開講式が行われた。

また、平成9年度の留学生14名に対する修了式が9月2日（水）留学生センターにおいて開催され、修了証明書が授与された。

本年度の研修の概要は、次のとおりである。

日本語・日本文化研修留学生に対する教育課程，授業計画及び授業時間数

区分	授 業 科 目	授 業 時 間 数		
		第一期 (10月～3月)	第二期 (4月～9月)	計
〔Ⅰ〕 総合	日本語・日本文化ゼミナール	30 時間	30 時間	60 時間
〔Ⅱ〕 日 本 事 情	① 日本事情 (A)	32	26	58
	{ (ア) 日本の社会に関する概説	(10)		(10)
	{ (イ) 日本の法と政治に関する概説	(12)		(12)
	{ (ウ) 日本の経済に関する概説	(10)		(10)
	{ (エ) 各分野の諸問題		(26)	(26)
	② 日本事情 (B)	50	42	92
	{ (ア) 日本文学	(20)	(22)	(42)
	{ (イ) 日本文化・歴史 (風土を含む)	(30)	(20)	(50)
	小 計	82	68	150
〔Ⅲ〕 特 別 教 育	① 現代産業及び現代文化に関する 参観・研修等	60		60
	② 伝統産業及び伝統文化に関する 見学等		60	60
	③ 特別講義		30	30
	小 計	60	90	150
〔Ⅳ〕 日 本 語	① 日本語概説	60	60	120
	② 日本語強化コース	240	80	320
	小 計	300	140	440
	合 計	472	328	800

部局の動き

大学院理学研究科附属天文台飛騨天文台創立30周年記念式典・祝賀会

本年度に創立30周年を迎えた大学院理学研究科附属天文台飛騨天文台は、10月10日(土)午前10時30分から岐阜県吉城郡上宝村の飛騨天文台に近い上宝トーカイ・リゾートホテルにおいて、記念式典を催した。式典では、黒河宏企天文台長が「飛騨天文台は、宇宙の中で我々に最も大切な太陽と太陽系の研究において、地上光学観測の国際的な拠点として重要な位置を占めて来ている。今後更に太陽宇宙プラズマ物理学などの新分野を発展させて、創立時のフロンティア精神を次の世代に引き継いで行きたい」と挨拶し、つづいて、長尾 真総長(代理 古澤 巖副学長)、小池 強上宝村長、尾池和夫大学院理

学研究科長から祝辞が述べられた。その後、研究紹介として、赤羽徳英大学院理学研究科助教授が「火星の四季について」、黒河天文台長が「太陽活動現象について」、柴田一成国立天文台助教授が「太陽宇宙磁気プラズマについて」と題する講演を行った。

式典終了後、祝賀会が催され、古澤副学長の祝辞と発声により乾杯した後、元附属天文台長川口市郎名誉教授、同小暮智一名誉教授、本田良三上宝村議会議長、桜井 隆国立天文台太陽物理学研究系主幹、前附属天文台長牧田 貢名誉教授の祝辞が述べられ、60名の出席者が和やかに歓談した。

なお、引き続き30周年関連事業として、10月12日（月）から14日（水）の3日間にわたり、記念研究会が行われた。全国から70名の研究者が集い、「21世紀の太陽研究の方向を探る」のテーマのもと、講演と活発な討論が行われた。

（大学院理学研究科）



寄附講座「国際予防栄養医学講座」の更新

平成10年10月1日、大学院人間・環境学研究科の寄附講座「国際予防栄養医学講座」が更新されることになった。

概要は次のとおりである。

- 1 部 局 名 大学院人間・環境学研究科
- 2 名 称 国際予防栄養医学講座
- 3 寄 附 者 大塚製薬株式会社

代表取締役 大塚 明彦

- 4 寄附金額 総額2億円（分割納付）
- 5 更新期間 平成10年10月～平成13年9月
（3年間）

- 6 担当教員 助教授相当 池田 克巳
助 手相当 細田 公則

7 研究目的

疾患の予知、予防を遺伝子の分析と栄養環境の制御により可能とし、人類の健康長寿の実現に貢献する「未病医学」を推進することを目的とする。

8 研究内容

高齢化社会の到来で最大の死因となる循環器疾患をモデル動物により、遺伝・環境因子を分析し、ヒトの疾患の遺伝による予知と栄養による予防法の開発をすすめ、さらに、地球上の様々な地域環境とその急激な変化を評価し、その保全・発展を栄養学的に研究する。

9 研究課題

- (1) 疾患モデル動物の病因遺伝子の分析と栄養による予防法の研究。
- (2) ヒトの家系調査から遺伝子検出による疾患予知法の開発と栄養による予防法の確立。
- (3) 遺伝・栄養相関からみた地域環境とその急激な変化を評価し、その保全・発展のための栄養学的国際共同研究（モナリザ研究）の実施。

（大学院人間・環境学研究科）

日誌

1998年9月1日～9月30日

- 9月7日 京都大学主任研修（10日まで）
- 8日 発明審議委員会
- 11日 連合王国 ノッティンガム大学Colin CAMPBELL副学長他2名来学、総長及び関係教官と懇談
- 〃 同和・人権問題委員会

- 16日 国際交流委員会
- 〃 国際交流会館委員会
- 22日 評議会
- 〃 保健衛生委員会
- 29日 博士学位授与式

訃報

堀内 三郎 名誉教授



本学名誉教授堀内三郎先生は、10月9日逝去された。享年82。

先生は、昭和13年京都帝国大学工学部建築学科を卒業。同年4月大阪府建築技手となり、同年12月から同21年4月まで兵役の後、昭和21年9月から同23年3月まで京都帝国大学大学院に在学、同22年7月から戦災復興院、建設院、国家消防庁消防研究所に勤務し、同研究所査察課長、検定課長、第二研究部長等を歴任し、消防行政に貢献された。昭和41年4月京都大学工学部教授に就任し、建築施設計画講座を担当された。昭和54年4月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和54年4月から同61年3月まで関西大学教授を務められた。

先生は、都市の消防力、都市・建築の避難安全計画、大震火災対策に関する研究において先導的な研究業績を残され、その発展に大きく寄与されるとともに、実際の都市、建築の防災安全化に率先して取り組むなど、その応用面においても多大の貢献をされた。主な著書には『建築防火』、『建物火災対策の12章一煙からいのちを守る方法』等がある。

また、日本建築学会理事、日本火災学会理事、同副会長、同会長、日本防災協会理事等の要職を歴任された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院工学研究科)

洛書

なぞなぞ語りの歌

土方 弘明

年とともに、あくせくの度合は高ずる一方で、読書は寝る前の30分程となり、寝つきを妨げぬよう古典に限られて来た。その中から特に寝つきのよさそうな話題をひとつ。

病気のため里下りした皇后寛子（頼通女）のつれづれ慰めむためにと経成（中納言）に請われて下野（寛子附女房）が詠んだなぞなぞ語りの歌：

○ ほど過ぎて花咲くまじくなりぬれば作りてのみぞ慰めにはする（岩波・平安私家集 四條宮下野集 116番）

「この花は何か？」という謎らしい。解けないのでヒントが欲しいという意味の経成の歌に対して

○ 山がくれ尋ねてもみで岩間より心と水の漏るをやは待つ

謎の答について、校注者は（かなり無理と思われる）既存の二説イ）ロ）を挙げたうえ「なお考えた」としている。

イ）ヒントの水→淵→藤という連想？により答は藤

ロ）……山がくれなる桜花……という拾遺集の歌より答は桜

さて、私案の答は蓮である。歌の末尾近くに「はす」がある。ヒントは水。主なき皇后宮の留守役に廻った女房達が、今朝はいくつ咲いた、明日はいくつ開くかと言い合って無聊を紛らわしていた池の蓮が、時期を過ぎて開かなくなったので、紙の蓮を作って慰めとする。状況的には、寛子に対する通信としても、極めて適した答であろう。難はといえば：

1）謎が易しすぎる。2）元来は「はちす」であった蓮が退化して「はす」となったのは後代のものである。この頃通用したか。

そこで「はす」の用例だが、多くはない。万葉集にはみつけない。源氏宇治十帖（下野の一代前乃至同時代）にはある。浮舟を助けた尼君の（なき

娘の) むこ中將が「はす」の実を喰べる。岩波・平安私家集所載の実方集143番と公任集518番は同じ歌で、実方集の方の言葉書きに「はす」がある。一方公任集の方の言葉書きでは、たや寺の君の娘達が蓮(漢字、直前に仮名書きの「はちす」がある。)の花を作っている。

「はす」は当時既に存在し、感じとしては、特殊な幼児言葉または女房言葉の類であったかと思え

る。もしそのとおりなら、経成が歌の中の「はす」をとっさには蓮と結びつけられず、ヒントの水で納得したのは自然であり、難として挙げた2)は逆に難1)を解消する鍵となると思うが、いかがであろう。

(ひじかた ひろあき 大学院理学研究科教授)

資料

人事院勧告の取り扱いに関する国立大学協会の要望書

このたび国立大学協会から人事院勧告の取り扱いに関し、以下のとおり総務庁長官、大蔵大臣、文部大臣ならびに各関係担当官あて要望書を提出し、その趣旨に則り配慮方を要望した旨報告があった。

平成10年9月11日

国立大学協会会長

阿部 謹也

人事院勧告の取り扱いに関する要望書

人事院による国家公務員の給与勧告が、労働基本権制約の代償措置として、また国家公務員の給与水準を適正に維持する制度として定着し、公務の能率的運営と公務員労使関係の健全性の実現に大きく寄与していることは周知の事実であります。

人事院勧告は、関係者の努力により実施されてきており、これにより各大学においても職員の勤務意欲の向上や、労使の信頼関係の保持等の点で好ましい影響がもたらされております。しかしながら、昨年は指定職俸給表の適用を受ける職員については給与の引き上げが1年間凍結され完全実施が見送られたところであります。

もとより、当国立大学協会は、我が国の財政が極

めて厳しい状況にあることから、公務員の人件費を極力抑制する方針であることも十分に承知しているところであり、各大学においては、9次にわたる厳しい定員削減の実施並びに行政経費の節減・抑制について不断の努力を重ねており、さらに事務組織の見直しによる事務職員定員の合理化減が求められていることから、なお一層の厳しい自助努力を重ねているところであります。

現在、国立大学においては、高等教育及び学術研究の高度化の積極的推進が最重要課題とされており、これが国民的期待でもあると考えます。また、平成7年秋に公布・施行された「科学技術基本法」では、国は、研究者等の職務がその重要性にふさわしい魅力あるものとなるよう、研究者等の適切な処遇の確保に必要な施策を講ずるものとしているところであります。しかしながら、国立大学における教育研究環境としての研究費、施設設備、教職員の給与についてはなお改善が必要な状況にあり、上記の課題に積極的に取り組むためには、大学教職員の適切な処遇を確保することが必要不可欠であります。このことがひいては優秀な人材を確保し、将来にわたる我が国の高等教育及び学術研究の進展に寄与するものと確信いたします。

上記の理由により、国立大学協会は、人事院勧告の実施に当たり、俸給表等の改定が勧告どおり速や

かに行われることを強く要望するとともに、昇給停止年齢の引き下げなどの見直しについては教職員に与える影響が極めて大きく、とりわけ大学教官をはじめ高度の知識・技術を有する特殊な職種にあって

は、高学歴により就職年齢が比較的高いことにも十分配慮されるなど、慎重な対応を特にお願する次第であります。

公開講座

—終了報告—

総合人間学部、大学院人間・環境学研究科公開講座 「生きる・知る・創る—生命活動の諸様相—」

総合人間学部と大学院人間・環境学研究科は共催で、一般市民を対象として9月2日（水）から9月4日（金）までの3日間大学院人間・環境学研究科大講義室において、公開講座「生きる・知る・創る—生命活動の諸様相—」を開催した。受講者は90名であった。

今回の公開講座は、「生きる・知る・創る」という生命活動の諸様相を生物学・精神医学・倫理学の立場からの分析と創造芸術・生命誌分野における実践によって明らかにすることを目的とした。

なお、講義題目、講師は次のとおりであった。

生命とエネルギー

—遺伝子操作を通して見た植物の進化と環境適応の戦略—

大学院人間・環境学研究科教授 豊島 喜則

生死間の交通論

総合人間学部教授 篠原 資明

記憶 —知と創造に不可欠な脳機能のしくみ—

総合人間学部教授 船橋新太郎

精神・脳・認識 —知るとはどういうことか—

留学生センター教授、大学院人間・環境学研究科教授 大東 祥孝

「死の質」と生命の倫理

総合人間学部教授 カール・ベッカー

科学の表現 —感性による科学への接近—

京都大学名誉教授、JT生命誌研究館館長 岡田 節人

（総合人間学部、大学院人間・環境学研究科）



話題

クラブ紹介

— ボート部 —

端艇部（現ボート部）は、1906年（明治39）に創部されたもので、京都大学体育会の中でも屈指の長い歴史を誇っており、ボート界にあっても関西の漕艇会をリードし、全国でも指折りの名門に数えられている。

1924年（大正13）に始まった一高との対校戦は、1949年（昭和24）の学制改革後、東大・京大教養部の定期戦の形で受け継がれ、来年には通算75回目、東大・京大戦として50回目の節目を迎える。

ボート部が誇りとするのは、歴史の長さだけではない。数々の活躍の歴史がある。その中でも、1956年（昭和31）のメルボルン五輪代表決定戦を兼ねた全日本選手権での決勝レースは、惜しくも僅差で代表の座を慶応大学に譲ったものの、第一次黄金期の頂点といえるものであった。

最近においても、エイトの部では1995年（平成7）全日本大学選手権6位、1996年（平成8）関西選手権2位、昨年の全日本新人選手権7位、また、舵手無しペアの部では、昨年と今年連続して全日本選手

権8位と健闘し、そして今年の8月には、全日本大学選手権の舵手付きペアで初の全国優勝を果たした。

1990年（平成2）には梶原 圭選手が、昨年には母里佳裕選手が日本代表に選ばれ、それぞれアジア大会、東アジア大会で銀メダルを獲得するなど、大学入学後からボートを始めても、国内のトップレベルまで成長するのが京大ボート部の特徴である。

現在、大津市の瀬田川畔にある本学の艇庫及び合宿所は、規模は西日本最大級であるうえ、機能的にも充実しており、OB等の支援のもと、トレーニングと学業との両立といったバランスのとれた生活を可能にしている。

ここを拠点として、60名を超える部員たちが、ボート競技の華、エイトでの悲願達成に向けて日々練習に励んでおり、毎年、全国制覇を目指して果敢に挑戦を続けている。



平成10年度関西選手権で力漕する対校舵手付きフォアクルー
(手前が京大のクルー)

—平成10年7月琵琶湖漕艇場—

(学生部)

(施設部)

能 楽 鑑 賞 会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を下記のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれては、是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。来場をお待ちしております。

記

日 時 平成10年12月15日（火）
午後6時00分開場 6時30分開演
（開演後の入場はご遠慮願います。）
8時30分終演予定

会 場 京都観世会館
京都市左京区岡崎円勝寺町44 ☎771-6114
（東山仁王門を東へ約300メートル）

演 目 狂 言「^{さつ}察^か化」 茂山 千作
茂山 千三郎
他

能 楽「^じ自然^{ねん}居士^{こじ}」 片山 九郎右衛門
植田 隆之亮
他

入場無料 学生証又は職員証等を持参してください。
定員は550名先着順とします。

（学生部）

